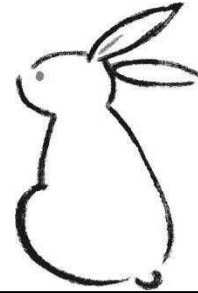




# Shiro-usagi

白兔・素兎



平川塾HP



アメブロ

文責：平川 達三

## 「1.5倍の法則」再来

「志の低い人間は、それよりさらに低い実績しか挙げられない。」

1979年から1998年にかけてプロ野球選手として活躍した、落合博満さんの言葉です。

100点満点というのは一時的にあるかも知れませんが、俗にいう「やりきった感」を抱けた経験を挙げてみよと言われれば、そう多くはないと思うのです。

実は、この落合さんの言葉をブログのネタにしたのは2018年の3月12日のことで、「1.5倍の法則？」という題名でした。

このときは、「やりきった感」や「書ききった感」があったのだと思います。

逃げ口上も兼ねて書きますと、いわゆる作家さんではないずぶの素人ですから、ブログ記事ひとつをとっても、ここに挙げる前も挙げた後も推敲するわけではありません。一応言葉を選んでいますが、いうなれば「書き捨て」に近いわけです。

そうでなくとも5年も経ていきますから、物事のとらえ方も考え方も随分と変わっています。そういう意味では、5年前・2年前・昨年にはどんなことを書いたかというのを思い起こさせてくれるアメブロの機能は秀逸だと感じさせられます。

それで、5年前の記事タイトルにした「1.5倍の法則」の考え方なのですが、これは今も変わっておらず、むしろ可能であれば「2倍の法則」でも良いのではと感じています。

「2倍の法則」はともかく「1.5倍の法則」については、根本的な部分で大きく変わったことがあります。

記事をアップした頃から5年も経っているので、時世の変化に応じて小さなことはたくさん変わっているかも知れませんが、小さく変わったことはたくさんあってイイけれど、大きく変わることは1つだけでイイのです。なぜなら、大きく変わることは、それだけ大事なことからだからです。

根本的なことだから、そんなにいくつも変わってしまったら、自分の軸がぶれてしまうことでもあるので、それでは他人様も自分も困ります。

それで、何が変わったのかということ、こういうことなのですね。

2月にリニューアルしたニュースレターの記事を書く上で、生徒さんや親御様に改めてお伝えしたいことを過去の自分のブログ記事から探すこともありますが、5年前の「1.5倍の法則」という考え方は自分にではなくて他人（ひと）様に向けられていたのです。

「書き捨て」に近いので、1週間前に何を書いていたのかさえ覚えていない

ことの方が多いのです。たかが1週間前でもこんな状態なのですから、昨年・2年前・5年前と時を経るごとにひどくなるどころか、片鱗さえ残されていないのですけれど、改めて読んでみると、

「へえ～、なかなかエエこと書いてたんやなあ～」とか、「ここ、ちょっと伝わりにくいなあ。今やったら、こう書くな？」というものもあれば、逆に「これ、何が言いたかったんやろ？」というようなこともあります。

この「1.5倍の法則？」は現在のワタシから見てどの辺りに位置するかというと、「ここ、ちょっと伝わりにくいなあ。今やったら、こう書くな？」に近いものがあります。

というのは、なかなか賛同を得にくい内容なのではと考えられるからです。つまり、「ここ」なのですね。

5年前は、「ナンで賛同を得られないのかな？ 多分、これを読んでも、自分には出来ないとか、ウチの子には出来ないとか、それが出来れば苦労しないとか、こういう精神論はイイから、そうするための具体的なことをもっと書いてよとか、そう思われたのかな？」という想いを残った記憶が残ってまいます。

落合さんの言葉にしても、

「それは落合さんだから出来たことでしょ？」

この言葉にポンと膝を叩きはしても、自分を鑑（かが）みて行動に移そうとする人は少ないわけですし、全員が素晴らしい行動力でやりはじめたら、名人だらけになってしまつて名人が名人でなくなりますから、おしなべて100人に聞かせて即座に行動するのが2人いればそのセミナーは大成功だと言われるくらいなので、2%なのですね。

でも、日本の令和4年（2022年）9月1日現在（確定値）の総人口は1億2497万1000人なのだそうですから（総務省データ）、1%でも約130万人で2%なら260万人と、とてつもない数字になるのです。

国勢調査人口順位というのがウィキペディアに掲載されているのですが、それを見ると、東京都港区とか兵庫県加古川市とかの人口に匹敵する数だと分かります。

だって、50人にひとりですから、小学校や中学校でいえば2クラスの生徒さんの中に必ず1人はいる確立ですからね。

5年前の自分には、こういうデータを引っ張り出してくるという発想も出来なかったし、第三者的な視点もなかったのです。

つまり、自分は奥深い場所に引っ込みながら、他人様に己の精神論を発信していただけだったのでしょ。そりゃあ、賛同は得られませんかな。

## 「1.5倍の法則？」～「先んずれば人を制す」の「人」って誰？

5年前の記事の文言を交えながら書いていきます。

\*\*\*\*\*  
【5年前…】

世間一般的には8割できたら十分だという風潮があるようです。

「100点満点のテストなら70から80点をとれたらイイじゃない。」

こういう認識に違和感を唱えると、逆に、「何もそこまで」とか「厳しい人ですね」などと言われる場合も少なくありません。

そういう風潮もあるからなのか、80%に到達できると安心感が強くなるからなのか、大抵の場合は、無意識的に100%に到達する手前でストップをかけてしまうのです。

そういうことを鑑（かが）みて、敢えて目標を少し高めに設定する人もいます。実は、こういう意識の人が伸びるのです。

特に生徒さんに向けて言っていることがあります。殊に中学生さんと高校生さんにはです。

「定期考査で8割以上をマークしたいなら、学校の進度よりも1.5倍先をせよ。」

名付けて「1.5倍の法則」。

正確には「法則」なんてないのですが、経験値から日頃感じていることを言っているのです。

こういうことですね。

テスト前日に試験範囲のところをどう

にかやり遂げた子の場合、どのような結果が出てくるかということ、大抵は6割止まりになってしまいます。6割止まりということは、実際にはそのほとんどが3割から5割の結果で終わってしまうということです。つまり、試験範囲の決められたことをやっくらさとはいえ、とにかく終わることが出来たからといって、本番で100%の力を出せるほど現実には甘くないということ。

テスト前に出された課題は、いざ勉強をしようにもどうすればよいかを迷う生徒さんに対して、どれを勉強しておけばよいかを指導者が指し示しているだけで、それを解いていくのは良いことですが、本当に解いて理解はしていないのです。

なぜなら、指定範囲をとにかく終わるというのが目標になってしまっていて、それに到達するための作業になってい

るからです。

\*\*\*\*\*  
え～…、正直申します。これ、5年前ではなくて、5年前の記事を引っ張り出してきて、前日に改筆と加筆をしたのです。

ところが、どうも上手くいかないのです。文章が手詰まりになってしまう…。なので、昨日のブログ記事のアップは断念しました。

人間のアタマというのはまこと不思議なモノでして、目覚めると昨夜の記憶のどこかが書き換えられているようで、あつと気づかされたのです。

また奥に引っ込んで他人様に自分の想いだけ（いわゆる精神論だけ）を発信するところだったなあ。

見る方向・伝える方向が他人様に向いているときは、言いつ放し書きっぱなしに

過ぎない。自分に向けられてこそ、自分を鑑みてこそ、その映し身が、わずかでも他人様の映し身に取り入れていただければイイなという願いをこめなければいけないのに、それが全く出来ていない。これでは、文章が詰まるわけです。

そこで、どこからか、別の記憶が割り込んできました。



「先生ってナンだろう？」

という記事を挙げる際に「先んずれば人制す」というのを書いた記憶があります。それで、何が割り込んできたのかと申しますと、この言葉の「人」というところなのです。他人（ひと）様の「ひと」ではないところ。それこそ、都合良く「別人」とか「他人」という文字をあてがひ、あえて「ひと」と読ませることも出来るはずなのに、「人」という表現となっているのです。

この「人」のなかには、自分も入っているではないか。

「われもまた『人』なり」。

自分がまず、せめて1.5倍の努力をして先々を見据えて進まねば、自分すらを制することが出来ない。「1.5倍の法則」を、まず自分がしなければ、生徒さんにも親御さんにも賛同していただけない。

5年前、こんなにシンプルで大切なことに気づけなかったのです。

大きく変わったなど、今回だけは、自分で自分を褒めたい気分……。

ちょっとだけうぬぼれてもイイかな。

## Let's Challenge!

小学4年生のちょっと高度な算数問題です。

■を「a」、▲を「b」、●を「c」、★を「d」と置いて……、

という数学の方法（連立方程式）では解けません。

値の分からない文字（記号）の数だけ式が必要です。

■・▲・●・★と4個の記号があるけれど、4つめの式の答えが分かりません。

ですから、連立方程式では解けないのです。

あなたはどのようにして解きますか？（解説解答は6月号をお楽しみに！）

4つの数●, ▲, ■, ★にそれぞれ次のような<sup>かんけい</sup>関係があるとき、□にあてはまる数を書き入れなさい。

$$\textcircled{1} \begin{cases} \bullet - \blacktriangle = 6.24 \\ \blacktriangle - \blacksquare = 2.55 \\ \blacksquare - \star = 5.245 \end{cases}$$

$$\textcircled{2} \begin{cases} \bullet + \blacktriangle = 15 \\ \blacksquare + \star = 9.67 \\ \blacktriangle - \star = 3.45 \end{cases}$$

上の3つの式が<sup>なり</sup>成り立つとき、

$$\bullet - \star = \square$$

上の3つの式が成り立つとき、

$$\bullet - \blacksquare = \square$$

これが  
できると  
かっこいい!



長さが●cm, ▲cm, ■cm, ★cmの4本のぼうを想像して、差を考えたりつなげたりしてみるといいよ。

出典元：Z会グレードアップ問題集 計算・図形

## 御御御汁

2021年03月13日(土) アメーバブログ

東京で食べて驚いたものといえば、うどんと巻き寿司。お出汁真っ黒で、それでいて塩気があまりない？ 巻き寿司が辛い？

東京の大師匠にそのお話をすると、

「あ、そうそう。大阪って何でもおいしいけれど、巻き寿司が甘いのはいただけませんねぇ。」

大阪の巻き寿司に入っている高野豆腐と干瓢（かんぴょう・乾瓢）は甘辛くしてあって、東京の巻き寿司にはその甘さが無いのです。

今でもそうなのかしら？

東京の方に言わせれば、甘辛い巻き寿司に違和感だらけで、根っからの大阪人である私からすれば真逆なわけで……。

で、うどんの出汁については、大師匠いわく、そもそも蕎麦の文化色が強いので、黒いとかナンとかで？

大阪は醤油は薄口、うどんの出汁は透き通っている。大師匠に言わせれば、見かけは薄い色なのに、結構しょっぱい。色が薄いくせに塩気が多い大阪のうどんの出汁に違和感あり。

所変われば品変わるというのか、日本の国内でさえこんなに文化の違いがあるのだから、仲の悪い国同士であればなるほど、諍（いさか）いが絶えないわけです。

富士川を挟んで水の質が違うのだそう。

私、料理人ではないので、詳しいことは分りませんが、大阪のうどん職人さんが、東京の生活用水で、大阪で作っているのと同じ出汁の取り方で作ったところ、あんまりおいしくなかったそうで、逆に、東京の蕎麦職人さんが、大阪の生活用水で、東京で作っているのと同じ出汁の取り方で作ったところ、やっぱり、あまりおいしくなかったそうです。

つまり、お水の質の違いによって、まずと出汁を取るための食材の違い、それに、出汁の取り方などが異なる食文化圏ができたといえるのです。ということは何となく知っているというのに、どうしても受け入れられない言葉があ

るのです。

おみおつけ。

漢字で書くと、「御御御汁」。「御」という字が3文字も続くという、ちょっとした凄みを感じますが、大阪では「みそ汁」というのが一般的です。

「膳の飯につけて出す汁物」というのが本来の意味で、「つけ」に、接頭語「御」をつけた「おつけ」という言葉を更に丁寧にし、「御御（おみ）」をつけたものが「御御御つけ」（おみおつけ）だとか、「おみ」は女房（天皇のおきさきの身の回りの世話をする女官）の言葉で味噌を指し、本来は吸い物のことであった「おつけ」に味噌の意の「おみ」をつけて味噌汁を「おみおつけ」と呼ぶようになったとか、諸説あるようですが、お公家さんの言葉なのですね。

こういう微妙な言葉の響きの隙間に何かの拍子ではまり込むと、なんだかんだと結構長く尾を引くのがワタシ。

そういえば、「上手い」と「旨い」の違いにも引かかっていたのを思い出しました。

夕飯の吸い物ひとつにしても、その吸

い物の上に季節のお花を浮かせて毎回の食を楽しんだのが明治の文豪であり国文学者でもあった幸田露伴さん。

孫にあたる青木玉さんいわく、自分の母親であり露伴さんのお嬢さんであった幸田文さんのように、なかなか祖父（露伴さん）の気に入るようには出来なかったそうです。

ところがある日、お花を吸い物に添える（浮かべる）意味が理解でき、やや甘い香りのする季節の花をそっと添えたところ、「今日は上手く出来たね」と露伴さんがお褒めになったそうです。

この場面が書かれている青木玉さんの文章を読んで、合点がいったのです。

でも、独り合点かもしれない。それでも、腑に落ちたのです。「上手く出来たね」の「上手い」と料理の「旨い」の言葉の響きの呼応の具合とか、料理が上手くいったことで、旨みという、日本人独特の琴線に触れる心情を指す実に深みのある言葉であるという独り合点。

ただ上手に作るのではなくて、加えて作る人の心意気を感じさせるほどに料理を提供する側のすべての手際の「上



手さ」に対して、作る側の心意気をちゃんと理解し、心置きなくかみしめながら食を楽しむ側の、作る人に対するねぎらいの言葉が「旨い」であるとするなら、何と粋で素敵な言葉があるのかと、あらためて日本語の響きの深さをかみしめる思いがしました。

こんな感じの、粋で素敵な「旨い日本語」を使えるようになりたいものです。

うんうん。そういう視点からであれば、「御御汁」も、まんざらでもないかな…。



## 素麺と冷や麦

2019年05月14日(火) アメーバブログ

食べ物のお話をもう一席。

昨日の昼ご飯は、冷や麦とかき揚げ&エビ天やったんですが、いただいた冷や麦を見て違和感をぬぐえないワタシ。

揖保乃糸って兵庫県産やなかったのかい？

実はこの冷や麦、関東在住のプロ友さんからいただいたお品ですが、関西圏で作られたモンが関東で売られているところにナンか違和感があったのです。髪の毛の先から足の指の爪先までどっぷりコテコテの大阪人なのがこのワタシ。幼少の頃から、素麺は食べても冷や麦は食べたことがなくて、素麺は関西の食文化で、冷や麦は関東の食文化という感覚が個人的にありながら、ホンマのところどないなってるやろといんうのは、長い間の疑問でした。

素麺といえば三輪素麺（奈良県産）。池利（いけり）の三輪素麺といえば、ちょっとした高級素麺という認識が大阪庶民の感覚なんとちゃいますかね。（知らんけど。）

そいでもって、兵庫県産の揖保乃糸と小豆島産の手延べ素麺。ちなみに「揖保乃糸」は兵庫県手延素麺協同組合が有する手延素麺の商標です。また、特に小豆島産の素麺は、国産の小麦粉を使っているとかで、お値段もそれなりにお高いわけです。で、その同じ揖保乃糸に冷や麦があるとな？ それで、素麺と冷や麦の違いってナンやろなと思ひ、ちょっと調べてみました。

言語由来辞典というサイトには「細打ちにしたうどんを茹でて冷水や氷で冷やし、汁をつけて食べるもの」で、うどんを細くしたものを「切り麦」といい、切り麦を熱したものを「熱麦（あつむぎ）」、冷やしたものを「冷麦」と呼ぶようになり、その後、うどんは熱して食べるものとなって、「熱麦」は衰退し、「冷麦」が「ひやむぎ」という言葉とともに現在に至るのだそうです。

それで、この冷や麦が生まれたのは室町時代で、当初は細切りにしたうどんでした。

室町時代は、鎌倉の末期から農耕の技術が飛躍的に発展し、庶民が力を持ち始めた時期ですから、うどんひとつを

とっても、当時の気配を伺うことが出来ます。



一方の素麺なんですが、中国は唐から伝わったのですね。



それで、素麺と冷や麦の違いはナンやろなということなんですが、素麺は細く延ばすために油が塗られていて、冷や麦には塗られていないそうなので、そないに大きな違いはなくて、今では太さが違うだけなんやそうです。

明治時代になるまでは、はっきりと区別されていたらしいのですが、明治時代になり、漸く日本にも産業革命が興り、製麺機が発明されてからはいよいよ区別がしにくくなったので、素麺と冷や麦を間違えないようにということで、冷や麦には赤や緑の色麺を入れたのだそうです。

JASによる規格があるようですね。

### 【手延べ】

そうめん：直径1.7mm未満

冷や麦：長径1.7mm未満

うどん：長径1.7mm以上

### 【機械製麺】

そうめん：長径1.3mm未満

冷や麦：長径1.3mm以上1.7mm未満

うどん：長径1.7mm以上

いろいろ調べていて分かったんですが、関東には熱い素麺いわゆる「にゅうめん」を食べる習慣がないそうですね。

ホンマかいな。

夏にしこたま買い込んだ素麺を冬のさぶい（寒い）さなかに冷やし素麺はあり得へんやろということで、あったこうして食べたんが始まりなんやそうですが、こういう発想をするんは大阪人やろなと思てたら、凶星ですがな。

ちょっと厚切りの茄子を茹で、おすましに仕上げ素麺をさらりと入れる。なかなか旨いですな。



イマドキは冷やしうどんなんかもありますが、昔は、うどんは熱くして食べるものという感覚やったんですね。

麺にまつわるお話って結構たくさんあるようですが、身近な食材にも知らないことだらけ。う～ん、勉強になります。

## ジュウガツザクラ

2023年03月15日(水) アメーバブログ

昨年3月28日に「サクラサク」という記事を書いています。というのを、アメブロの機能が教えてくれました。業務終了後にいつもお詣りする多米社（ためしゃ）の染井吉野はまだ開花待ちの状態ですが、昨年3月28日の記事にはその写真を掲載しているので、もう間もなくかと思うと、ちょっとわくわくします。

先日、近隣の公園で昼間にウォーキングをしたあと、クールダウンを兼ねてサクラの木を見ながらゆっくり歩いてふと目に留まった木があります。

染井吉野・河津桜・ソメイヨシノ・カワツザクラ・サトザクラ・染井吉野…

あれ？

十月桜とな？

比較的背が低くてどっしりとした感じで豪華な花を咲かせているのが河津桜。

どっしり感があり比較的背が高くて大きく腕を天に向けて広げているのが染井吉野。こちらはまだ開花待ち状態です。

その合間に、背は高いけれど幹も枝もやや細めで、大阪弁で言う「シュッとしている」感じで、可憐な花をポツリポツリと遠慮深げに咲かせているのが十月桜です。

「不思議な名前やな。なんて読むんやろ？」

漢字で「十学桜」と書かれていても、文字通りの読み方をしない場合もありますから、気になります。

疑問が生まれたら調べどき。さっそくGoogle先生に尋ねてみる…。

「春と秋から冬にかけての二度開花する二季咲きが最大の特徴である。」

文字通りの「じゅうがつざくら」。

あ、そういえば、11月頃ですかね？寒くなっているのに桜と思しき花が咲いているので、「狂い咲きでもしてるのかな？」なんて思ったことがあるの

を思い出しました。

まあ、このご時世ですからね。「トンデモ」が起きても珍しくないことも、間々ありでして…。

ウィキペディアの解説を目にして「狂い咲き」とつながりましたが、別にそうではなくて、解説の通り、2回目の開花だったのを目にしたのです。

こういう瞬間に巡り会っていると、ウォーキングをしていて良かったなと思えて、ちょっとした嬉しさと共に、ささやかな幸福さを感じます。

それにしても大阪市公園局の職員さん、なかなか粋なことをしてくださいますね。





# 実は女神様でした～葛城・古文の旅～

2021年08月27日(金) アメーバブログ

古文『岩橋の夜の契(ちぎ)り』というお話です。

「岩橋の夜の契りも絶えぬべし  
明くるわびしき葛城の神」

## 【現代語訳】

あの葛城の神が岩の橋を架けようと言った約束が途中で絶えたように、(あなたが明るくなっても帰らないのなら)夜に交わした愛情もきつと絶えるでしょう。夜が明けることが辛い葛城の神(と同様に、醜い私も顔を見られたくないのです)。

(いづな書店/改訂版プログレス  
高校古文総演習発展編より)

役行者(えんのぎょうじゃ)とは、葛城の山から吉野の山までを駆け巡った、いわゆる修験者(しゅげんじゃ)であり、超能力者であった「怪人」です。

今でもそうですが、奈良は葛城山系から吉野山を越える新宮までの道のりは、とても険しいのです。

現在は紀伊半島を半周するように紀勢本線が敷設されていますが、それでも半島の山肌に張りつく様子は変わらず、全ルートでの複線化は実現されていません。

いわゆる難所です。

現在の奈良県五條から和歌山県の新宮までを紀伊半島を南東に貫く鉄道の敷設計画は、明治時代からあったらしいのですが、明治時代には技術的に不可能で、たびたび敷設の話が挙がるものの、現代では技術的には可能ですが、採算が全く合わないということで、結局立ち消えてしまいました。

実際にこのルートをクルマでですが、ひたすら走った方であればお分かり戴けると思います。

奈良県五條から熊野本宮大社(和歌山県)まで片道180kmほどです。

深い谷底から見事な橋脚を伸ばし上げ、その橋脚を支えに渡された橋梁のおかげで、尾根の中腹に掘られたトンネルと向こう側の尾根の中腹のトンネルまで、まるで役行者のように「ひとまたぎ」で2分とかからずに通ることが出来ます。それでも、いまだに工事は続けられていて、離合困難な旧道に依存せねばなら

るところがある、こちらも難所です。

過去には、大規模崩落が起きたり、尾根ひとつ分が一夜にして崩れ去るといった大水害にも見舞われています。

ここ数年前までは、神業のような谷間をまたぐ道路なんて全くなく、旧道を進まねばならないときは、片道5時間を要していました。

現在はその道路のおかげで片道3時間半ほどで行くことが出来ます。

でもこれは現代であり、文明の利器である「鉄の早馬(はやうま)」での話です。

時代は1113年頃のことです。

そこで、役行者は、葛城と吉野に岩の橋があればよいのに、そうならばみんな苦心惨憺(さんたん)せずとも行き来が出来るのにと考えて、一言主(ひとことぬし)にお願いしたので。

すると一言主は、

「私は醜いので、昼間に岩の橋を架ける仕事をすれば、山道を行き来する人が見て、さぞや恐怖するでしょうから、橋を渡す仕事は夜だけに限らせてはもらえないか。」

とおっしゃったので、

「願わくば速やかにお願いしたいけれど、仕方のないことでしょう。」

と役行者は申し上げ、心経を読んで祈ったのです。

ところが、一言主は最初の夜も、少しだけ仕事をして、もちろん昼間は何もしませんでした。そこで怒った役行者は、護法の鬼神に一言主を縛り付けて下さいとお願いを申し上げます。

すると、一言主は、大きな岩に縛り付けられて、今(当時としての「今」)もなお、縛り付けられたままなのです。

…という筋書きです。

これには後日談があって、役行者の超能力に苦しめられた一言主は、役行者が謀反(むほん)をたくらんでいると天皇に讒訴。

※ 讒訴(ざんそ)：悪意をもって事実を曲げて言いつけること。

その結果、役行者は捕縛され、伊豆大島へ流されたのです。

超能力者であった役行者は伊豆の大島

から毎晩、海上を歩き渡って富士山に登っていたとされています。しかしながら、葛城から吉野までの岩の橋はついに架けられませんでした。

そして、解説書を読んで驚かされました。一言主の神は、女神様だったので。し、知らなんだ…!

確かに、冒頭で歌われている「私は醜いので」というところから推測は出来ずし、「最初の夜も早々とすっぽかして昼間は出て来ない」ところなどは、男女の夜な夜なの出会いを彷彿とさせる、随分と意味ありげな表現がなされています。

因みに一言主様は、現在は、奈良県御所(ごせ)市の葛城にある、「葛城一言主神社」にいらっしゃいます。

神社の正式名は、「葛城坐一言主神社(かつらぎにいます ひとことぬしじんじゃ)」です。

古文って、分かってくるとおもしろい。そう思います。



## 編集後記

そろそろ紫外線対策云々の季節ですね。…なんちゅう挨拶しとるねん、なのですが、昨年からは始めたウォーキングで舐めてかかったワタシは、露出している肩や上腕と前腕、それと脚がわずか3日ほどでカリカリに日焼けしてしまいました。それを見た友人(ケーキ店の女将さん)から、「日焼け対策せなアカンでしょ」と叱られたのも1年前だなんて、ホンマに月日の経つのは速い(早い)など実感しております。

さて、この5月号は、随分と文字量が多いというのか、細かな記事の寄せ集めというのか、最初にイメージしていたものからちょっと遠のいてしまいましたので、4枚構成としました。手になさり、「あれ? 1ページ少ないぞ。あの塾長、さては手を抜きおったな?」と、ほくそ笑まれたりして…。

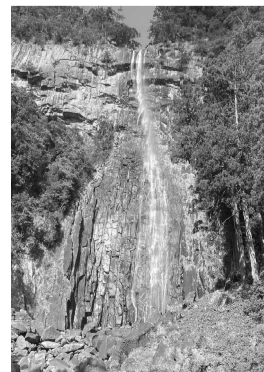
ワタシ、放浪癖があります。大抵は8月1日から5日間と年末年始の5日間にお休みをいただいているのですが、家でじっとしてられないのです。とはいっても、向かうところはおおよそ決まっていて、大神(おおみわ)神社・出雲大神宮・飛瀧(ひろたけ)神社・玉置神社・高嶋神社・出雲大社という感じで、神社詣りがほとんどです。

でも、大きな神社さんが抱えていらっしゃる「〇△□の会」みたいな組織には一切加入していません。そういう意味では身が軽いというのか自由奔放

というのか、そういう「会」に入れていると思いき強烈な、いわゆる「信者さん」からは、「不良の神道」と、面と向かって罵倒されたこともあります。しかし、あくまでもワタシは古代史ファンのひとりであり、自由奔放に古代史にまつわる神社さんを巡っていて、その中でも特に波長が合うというのか、参詣して気持ちが良いところへ素直に足を運んでいるだけで、この立ち位置は10年前から変わっていません。ですから、「〇△□の会」への入会を勧める気なんて全くありませんしね。だからといって、そういう会に属する人たちを批判する気もありません。どうぞ勝手にというスタンスです。

さて、こういうお話をしましたので、それにまつわる場所を巡っている様子もブログにしたためていることを自覚する意味も兼ねて、タイトルとQRコードで紹介致します。古代史的な小難しいことや、神社詣りはこうあるべきだなんていう理屈は一切書いておりません。むしろすったもんだでアタフタしているワタシを楽しんでいただければ幸いです。

ナンカものすごいというのが分かった話



那智の滝



午後3時台に行けない話



まるっと?  
近鉄南大阪線①～④



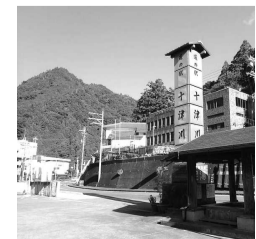
特急「はるか」の  
グッジョブ爆走

出雲大神宮～京都駅ナカの

「ちく天うどん」は外せない～



乗ってみたい～日本最長の路線バス～



奈良県十津川温泉郷

